

## 令和5年度 昭和館作文コンクール 審査結果

No	作品番号	氏名	学校名・学年	賞
1	247	田中 颯人	千代田区立和泉小学校 5年生	厚生労働大臣賞
2	8	竹内 あかり	板橋区立志村坂下小学校 6年生	昭和館館長賞
3	254	秋永 橘香	新宿区立西早稻田中学校 1年生	優秀賞 1
4	255	三尾 怜子	横浜市立川和中学校 1年生	優秀賞 2
5	244	武井 悠璃	大田区立大森第三小学校 6年生	優秀賞 3
6	153	尾芦 咲茉	杉並区立済美小学校 6年生	優秀賞 4
7	249	五野上 助	青梅市立霞台小学校 4年生	優秀賞 5
8	146	松尾 凧	杉並区立済美小学校 6年生	優秀賞 6
9	61	秋田 凱吾	板橋区立志村坂下小学校 6年生	優秀賞 7
10	72	窪田 栞奈	板橋区立志村坂下小学校 6年生	優秀賞 8

ぼくにもできる平和につながる道

和泉小学校 五年 田中 颯人

ぼくが昭和館に行き、たきかけは、小学一年生の時に夏休みの自由研究で千代田区の戦争について考えたからです。なせ千代田区の戦争について考えたのかというと自宅の近くにある公園に大きなお墓みたいな石碑があって母に聞いたところ、戦争で戦死した者慰霊碑として教えてくれました。そして慰霊碑は戦争で亡くなった人たちを慰めるために建てられたものとなりました。そこで千代田区の戦争について検索したところ、千代田区戦跡マップというのがあって、そこを巡ることにしました。

まずは銚子倉橋欄干傷跡から千鳥ヶ淵墓苑に向っている最中に昭和館の目の前を通りました。昭和館について母から戦争を学べる展示がしてあるということを知り、教えてもらいました。

昭和館を見学すると7階と8階では戦中の国民の暮らしと戦後の国民の暮らしという展

示がしてあり、体験コーナーでは防空壕体験  
や防空頭巾をかぶるものも用意してある。

そしてぼくはこの夏に『この世界の片隅に』  
という小説を読みました。読んだ理由は自分  
が通っている小学校にロシアからの転校生が  
来たことで、ロシアがウクライナに侵攻して  
いるニュースを思い出して改めて戦争につい  
て考えたいと思っただけです。そこでぼくは  
一年生のころに行った昭和館のことも思い出  
し、もう一度行ってみたいと思いました。

小学五年生になって改めて展示を見ると、  
戦争によって食べ物が配給制になって、子供  
も、軍事工場で働くなど普通の生活が送れな  
くなる中で必死に苦しい生活に耐えながらそ  
れでも空襲などで死んでしまう人々の様子を  
見て、涙がこみ上げてきました。

だから防空壕体験は一年生の時よりずっと  
戦争の恐ろしさを感じられました。そして、  
初めて挑戦した井戸の水くみ体験では、一日  
使うための水をくむのがどんなに大変だった

かということを思い知りました。当時は多くの成人男性が出征していたので、ぼくのよう  
な小学生が水くみをしたり、家族のために働  
いていたらと知り、今の暮らしかどんなに幸せ  
かと思いました。同時に家の事も父が母が  
うてくれていることが当たり前だと思っ  
た自分がはかしくなりました。そして家族  
みんなでご飯を食べられることがすごく  
幸せなことも分かりました。

そして、戦後、家が家族、友人を失い、食

料も少ない中で、必死に働いて世界有数の国  
を築いた日本人はすごいと思いました。

昭和館を見学して改めて気付いたことは、  
くには戦争を止める力はないけど、戦争を伝  
えること、忘れないことが、小学生のぼくに  
もできる平和につながる道だということだ。

だからぼくは、これから戦争を忘れない  
ために昭和館を訪れ、昭和館を多くの人に教  
えてあげたいと思います。それがぼくにでき  
る平和につながる道と信じて。

3

歴史から学ぶということ

志村坂下小学校 竹内 あかり

その手紙を読んだ時、私ははたと息をのみ  
ました。「いっまでも、いっまでも、お元気  
で」。他愛もない、そんなあいさつは、七十八  
年前の日本では、永遠の別れを告げる言葉に  
なり得たのだと知りました。

九月、社会科見学で訪れた昭和館には、太  
平洋戦争中、海軍が編成した「神風特攻隊」  
の搭乗員となり、若くして命を落としていっ

No.

No.

た若者たちの手記が展示されていました。日  
本はアメリカに圧倒的な国力の差を見せつけ  
られ、戦争を始めました。しばらくすると、もはや  
まともに戦えなくなっていました。  
そこで海軍が考え出したのが、飛行機や小  
型艇、潜水艇を操縦したまま、アメリカの軍  
艦に体当たりして破壊を狙う「特攻」でした。  
爆弾を落とすよりも命中率が上がることな  
りから考え出されました。敗色が濃厚とな  
り、日本が逆転を夢見て編み出した戦法で、搭乗

買は生きて帰ってくることを考えない残酷なものでした。

日本では負けが続いて、多くのパイロットたちが戦死していたので、特攻に参加した多くの搭乗員が、新たに志願したリ、招集されたりした。二十代の若者たちでした。特攻は兵士たちが自発的な思いで参加するということになっていました。実際には拒否できないものでした。例えば、上官は白い紙を兵士たちに配って、特攻隊に参加したいか、し

たくないかを書かせます。

でも、この時に「参加しない」と書けば、「非国民」「軍人の恥だ」とのしられ、暴カも振るわれます。周りの兵士からも糾弾されるため、誰もが「参加したい」と書いていたのです。当時は「お国のために死ぬ」ことを子供の頃から教え込まれ、そう思い込まされていた事情もあります。

自由や平和にあふれているように見える今の日本で、こんなことが再び起きるのでしょ

うか。私は油断すれば起きると思います。太平洋戦争が始まるわずか二十年ほど前は、大正デモクラシーと呼ばれる時期で、西洋の音楽やファッションが盛んで、民主主義を求め、世論が高ま、た時代だ。たろうです。それが欧米に負けまいと、植民地を広げて国を強くしようとしたことで、戦争の泥沼にはまり、やがては自分たちの首を絞めることになり、たからです。

平和は努力しなければ、維持できないものですよ。少しでも油断をすれば安易に戦争をしかねません。その時、最もつらい形で犠牲になるのは、時攻隊員のように若者たちです。まずは、過去の歴史を振り返り、長い目で見れば戦争によ、て、人々が幸せになることはいないことを学ぶことから始めるべきだと思います。もちろん、簡単な事ではありませんが、そのような思いを多くの人々が持つ、ていれば、戦争を支持する指導者は選ばれません。だからこそ、民主主義は大切だと思います。